

## 要約

論文名：ヨルダン川西岸地区におけるイスラエル入植地と民族宗教派入植者に関する考察——死／死者の景観と規範共同体の境界——

今野泰三

### 序章

「民族」とは何か。「宗教」とは何か。民族と宗教の何が、世界中の人々を強く惹きつけるのか。なぜ、「民族」と「宗教」は、社会を統合する力になる一方で、時に激しい争いをも引き起こしてしまうのか。

この問題を考える上で忘れてはならないのは、「民族」や「宗教」に基盤を置く共同体や政治運動は常に、それが実践される空間や土地と結びついて実態をなし、そして変容していくという点である。すなわち、規範やイデオロギーは空間や土地や場所といった物質的基盤に枠づけられ、それらと結びつくことによって、特定の人々の集合的アイデンティティや他者との関係性を方向づけ、異なる共同体の間での紛争の在り方を規定するのである。他方で規範や実践は、空間や土地の作用を通じて異なる共同体を融合させ、境界を曖昧にし、新たな境界を形作っていくこともある。では、こうした地理学的な理解の方法は、具体的にはどのように民族や宗教を巡る紛争に対する理解を深めることに役立つのであろうか。

本稿では、宗教とナショナリズムと土地が絡み合って 100 年の紛争地図を織り成してきたパレスチナとイスラエルの事例を検討することで、文化地理学と政治地理学で提示されてきた理論や方法論が、民族や宗教や土地を巡る政治過程や紛争を理解するのに有効であることを示す。本稿はパレスチナ・イスラエル紛争の中でも特に、1967 年戦争以降、ヨルダン川西岸地区（以下、「西岸地区」）で強引な土地収奪と入植を続け、時にはイスラエル政府・軍とさえ対立してきた「民族宗教派」（*datim leu'mim* ; *national religious Jews*）と呼ばれるユダヤ人たちを取り上げる。その理由は第 1 に、民族宗教派入植者の行動や規範が、パレスチナ・イスラエル紛争と占領体制の無視できない構成要素となってきたからである。第 2 の、さらに重要な理由は、これら民族宗教派の入植者たちは、ユダヤ教言説とシオニズム思想を固く結びつけ、その結合状態を「神の意思の現れ」として神聖化し、しかもその「神の意志」である「ユダヤ民族の贖い」が占領地での入植地建設を通じて実現できると信じてきたからである。それゆえ、彼らがより一層力を持てば、イスラエル国家社会の法・制度・規範を根底から変容させ、パレスチナ・イスラエル紛争を妥協不可能な宗教紛争へと導く可能性が高いのである。その点でも、民族宗教派入植者はパレスチナ／イスラエルの現在と未来を考えていくうえで無視できないアクターである。

本稿の目的は、民族宗教派入植者たちの行動の背景にある規範やイデオロギーを、西岸地区の空間性や社会経済構造と関連づけて分析し、それらの要素の間での相互作用が民族宗教派の入植戦略や集合的アイデンティティ、ならびに、彼らとパレスチナ人や世俗的ユダヤ人との関係性を枠づけていく様を、西岸地区でのフィールド調査と文献調査を通じて明らかにすることである。第1章では、文化地理学と政治地理学における宗教と政治と空間を巡る議論を整理し、そこから民族宗教派に関する研究における地理学的な課題を抽出する。続く第2章では、「入植地問題」の歴史的背景を理解するため、1967年戦争以降に占領地にユダヤ人入植地が建設され、民族宗教派が独自の共同体と文化を形成するに至った過程を整理する。続く第3章と第4章は、第1章で抽出した地理学的な研究課題を踏まえて実施したフィールド調査の結果報告である。本稿の章立ては以下の通りである。

---

## 序章

- 第1節 本論文の目的
- 第2節 本稿の背景と対象
- 第3節 本稿の構成

## 第1章 紛争地における宗教と政治の地理学的研究—パレスチナ／イスラエルの事例

- 第1節 問題の所在
- 第2節 宗教とナショナリズムに関する地理学的研究
- 第3節 パレスチナ問題に関する地理学的研究
- 第4節 まとめ

## 第2章 1967年戦争以降のイスラエルの占領と入植政策

- 第1節 問題の所在
- 第2節 1967年戦争とイスラエルの領土拡大
- 第3節 入植地建設の過程
- 第4節 まとめ

## 第3章 民族宗教派のイデオロギーと死／死者の表象—ナラティブと墓石・記念碑

- 第1節 問題の所在——ナラティブ，追悼・顕彰，アイデンティティ
- 第2節 宗教シオニズムとは
- 第3節 活動的メシア主義と死／死者
- 第4節 死／死者を巡るナラティブと空間表象
- 第5節 まとめ

## 第4章 民族宗教派の越境—ヨルダン川西岸地区の「混住入植地」

- 第1節 問題の所在
- 第2節 理論の枠組み——規範共同体，政治共同体，規範の境界線
- 第3節 本研究の対象と課題——入植地とグーシュ・エムニーム

#### 第4節 混住入植地モシャール・ギティット

#### 第5節 まとめ

### 結論

### 参考文献

---

以下では、序章を除く第1章から結論までの内容を要約する。

## 第1章「紛争地における宗教と政治の地理学的研究——パレスチナ／イスラエルの事例」

宗教地理学とは、宗教と環境（ないしは空間）の関係性に関する学問であり、文化地理学の下位分野に位置づけられている。だが、宗教地理学では、民族紛争や領土紛争における宗教の役割や影響力についての研究の蓄積は多くない。他方、政治地理学は国家と領土を巡る問題や境界の政治的機能などを分析してきたが、宗教と空間の関係性はやや看過されてきた。そのため、宗教地理学と政治地理学との架橋が必要されているのである。その点で、パレスチナ・イスラエル紛争、特にユダヤ人入植地と民族宗教派ユダヤ人の事例は、政治と宗教と空間の複雑な繋がりが顕著に現れている例として注目に値する。

しかしながら、ユダヤ人入植地および民族宗教派ユダヤ人に関する既存の研究においては、建造環境や景観上での語りや記憶の表象、および異なる共同体の間での境界の揺れ動きなど、地理学では重視される物質的側面には十分に関心が払われてこなかった。特に、民族宗教派入植者たちが占領地での入植の過程で殺された隣人・仲間・親族とその死を追悼・顕彰する独自の文化を形成し、「贖いのシオニズム」ないしは「実践的メシア主義」と呼ばれるイデオロギーや入植活動と結びつけて景観上に表象することで再生産している点が十分に検討されてこなかった。

また、独自のイデオロギーと景観を特徴とする民族宗教派入植者の共同体をパレスチナ／イスラエル地域の総体の中に位置づけつつ、彼らとその「他者」である世俗派イスラエル人やパレスチナ人との物質的・社会的・経済的な境界のダイナミクスも、既存の研究では十分に検討されてこなかった。そして、そうした民族宗教派と世俗的なイスラエル人との境界や関係性が近年の政治状況の変化の中で新しい動きを示している点についても、パレスチナ／イスラエル問題へのインパクトを考慮すれば重要であるにもかかわらず、いまだ十分に分析されていない。

以上のことから、民族宗教派入植者による死／死者に関する語りとその景観上での表象の在り方、および彼らとパレスチナ人や世俗的ユダヤ人との間の境界のダイナミクスを分析していくことは、西岸地区の民族宗教派入植者たちの文化と空間的实践、彼らとその中心的位置を占める「入植地問題」、および、それらを内包するパレスチナ／イスラエルの地域的な特異性を理解するための重要な視座を提供すると考えられるのである。

## 第2章「1967年戦争以降のイスラエルの占領と入植政策」

1967年戦争でイスラエルは、西岸地区やガザ地区などの領土を新たに占領した。そして、それら占領地を巡って様々な入植計画・占領政策が提案され、それらが時に互いに競合しながらも、国際法に違反するユダヤ人入植地の建設を方向づけていった。すなわち、1967年直後の数年間で、「一時的な安全保障上の措置」というレトリックで正当化された入植地建設の手法が定式化されたのである。イスラエルによる西岸地区、ガザ地区、シナイ半島、シリア高原の支配は一般に「占領」と呼称されてきたが、この用語は和平が締結されるまでの一定期間、占領国が一時的に領土を管理することを意味する。だが、パレスチナ／イスラエルの場合、この「占領」という用語にはパラドックスが付加されている。イスラエルによる支配が「占領」と定義されることで、イスラエルは永遠に「一時的」に領土と住民を併合せずして支配を継続し、「平和を求めている」というレトリックを掲げながら占領地の資源と労働力を搾取し、入植地を建設することができるのである。

そうした中、領土拡張主義（大イスラエル主義）を掲げる民族宗教派の入植者たちは労働党政権やシオニズム運動入植機関の様々な支援を受けながらも、他方で労働党のアロン計画を超える範囲でも入植を行い、労働シオニストとの競合関係・対立関係を深めていった。だが1977年以降のリクード政権において正統なアクターとして認められるに至り、労働党政権が認めていなかった民族宗教派の入植地はイスラエル国内法によって合法化され、民族宗教派は入植地建設を主導するエージェントとして重要な位置を占めていった。そして、イスラエル政府・軍やシオニズム運動諸機関からの財政的・政治的・軍事的な支援を受けながら、西岸地区に強固な権力基盤と独自の共同体および文化を形成していったのである。

## 第3章「民族宗教派のイデオロギーと死／死者の表象——ナラティブと墓石・記念碑」

しかし、1987年の第1次インティファダ勃発以降、占領と入植地建設に強く反対するパレスチナ人たちによって国家・軍のエージェントとして入植していたユダヤ人が殺されるケースが急増した。そうした状況の下、入植最前線にあった民族宗教派の入植者たちは、仲間や親族の死を「贖いのシオニズム」というイデオロギーと結びつけ、両方を正当化するように語り、さらに殺害現場での記念碑（モニュメント）や「記念碑入植地」の建設といった実践によってその語りや記憶を占領地の空間に刻印していくようになった。

著者は、親族や仲間を殺された入植者への聞き取りや、その死／死者を顕彰する記念碑や墓石の分析を行った。そして、このような死者を顕彰する記念碑や入植地の建設によって「贖いのシオニズム」と死／死者が占領地の景観に刻印されることで、「贖いのシオニズム」と死／死者と占領地の空間が不可分なものとして結びつけられ、それによって民族宗教派の集合的記憶や場所との感情的繋がりが強められていることを明らかにした。さらに、そうした結びつきは、アラブ人やパレスチナ人に対する民族宗教派入植者たちの敵対心を強め

るとともに、自己を絶対善とし、パレスチナ人を絶対悪とする彼らの偏狭な歴史観と紛争観をも強めており、彼らの集合的アイデンティティや他者との関係性の重要な構成要素となっていることも明らかにした。

他方で、現地調査からは、隣人や親族の死が「贖いのシオニズム」や神に対する信仰を弱め、西岸地区中部の丘陵部からその周辺部やイスラエル領内へと民族宗教派入植者たちを押し戻すケースも少ないながら存在していることも発見した。そして、そうした逆流する移動の経緯や当事者の語りには、死／死者というテーマに限定されない、より広範な民族宗教派内での近年の変化と新たな動きが反映されていることも明らかとなった。それは民族宗教派の共同体がどこに向かい、それがパレスチナ／イスラエル全域にどのようなインパクトを与えていくのかを考えていくうえで無視できないものであった。

#### 第4章「民族宗教派の越境——ヨルダン川西岸地区の『混住入植地』」

民族宗教派が西岸地区で創出した特異な文化と景観、および、西岸地区中部の丘陵部からその周辺部やイスラエル領内へと移動するケースを検討する中で、以下の疑問が新たに浮かび上がってきた。その疑問とはすなわち、民族宗教派の特殊なイデオロギーや行動が世俗的なイスラエル・ユダヤ人との関係性にどのような影響を与えているのか。占領地での入植地建設を最大の価値とはしない宗教シオニズムの新たな意味づけが、民族宗教派入植者たちの間でどの程度広まっているのか。新たな戦略として民族宗教派が採用した、世俗的なユダヤ人とともに暮らして相互理解を深めるという「混住入植地」建設の動きは、パレスチナ／イスラエルにおける政治的・経済的・社会的状況の変化をどのように反映しているのか。そして、そうした状況の変化を受けて登場した民族宗教派の中での規範や実践の変化は、西岸地区の世俗的なユダヤ人入植者やパレスチナ人と民族宗教派入植者の間に存在する境界にどのような影響を与えているのか。

これらの問いの根源には、イスラエル国家・社会の主流に位置する世俗的なシオニストと民族宗教派の間での、法や規範、価値観をめぐる競合と対立と調和という問題が関係している。そのため著者は、世俗派のユダヤ人と宗教派のユダヤ人が混住するようになって「混住入植地 (yishuv me'orav)」と呼ばれるようになった、ヨルダン溪谷の入植地「モシャーヴ・ギティット (moshav gitit)」で調査を行った。特に、この入植地の社会経済構造や居住形態、およびイスラエル国家やユダヤ機関との関係性を、入植者に対する聞き取りや文献調査から明らかにするとともに、そこに暮らす民族宗教派と世俗派の入植者たちの境界の在り方とその変化の様相を詳細に分析し、それを差別と不平等が埋め込まれたパレスチナ人と入植者との間の境界の在り方と関連づけて検討した。

この調査の結果、モシャーヴ・ギティットに見られるような「混住入植地」の試みは、仲間や親族の死を契機として西岸地区中部の丘陵部からその周辺部やイスラエル領内へと移動したケースと同様、必ずしも「贖いのシオニズム」のイデオロギーや規範に対する問い直

しを伴うものではなく、むしろそれを補強・強化・推進する手段として民族宗教派住民に見なされていることが明らかとなった。しかも、この「混住入植地」の試みは、パレスチナ人との差別的・植民地的な関係性の問い直しを全く伴っていないにもかかわらず、民族宗教派にとっては、イスラエル社会で「正統な領域」と見なされている「hityashvut (定住地)」に参入する契機ともなっていた。そのためこの新たな動きは、西岸地区中部の丘陵地帯で日々パレスチナ人に対する直接的暴力を行使し、傍若無人にパレスチナ人の耕地や財産を破壊している教条主義的な入植者以上に、入植地問題およびパレスチナ／イスラエル問題全体に長期的かつ深刻なインパクトを与える可能性がある」と結論づけた。

## 結論

本稿では、パレスチナ・イスラエル紛争および「入植地問題」の重要なアクターである民族宗教派入植者の共同体とその空間的側面を、長期の現地調査と文献調査を通じて多層的・多角的に分析した。より具体的には、民族宗教派入植者の「贖いのシオニズム」もしくは「実践的メシア主義」と呼ばれるイデオロギーと、それに基づく政治的・空間的实践が作りだしてきた文化・共同体・境界の関係性を理解するために、彼らのイデオロギー、語り、景観、居住環境、入植地内の社会経済構造、およびその背景にある地政学的要因などを総合的に観察し、記録・分析した。それによって、西岸地区のユダヤ人入植地が一般に理解されているほどに一樣なものではなく、その内部には様々な規範・語り・記憶・思惑が存在し、それらが常に揺れ動きながら、様々な景観や境界を織りなしていることを示した。

本研究では、ユダヤ人入植者とその入植地を対象を限定したため、占領地のパレスチナ人が置かれている客観的状況や彼らが日々経験する「入植地問題」の実態、および、パレスチナ人の入植地問題やユダヤ人入植者に対する認識の在り方については十分に検討できなかった。また、1967年戦争以降の「狭義の入植地問題」に分析対象を限定したため、19世紀後半から1967年戦争までの期間に生み出された「広義の入植地問題」を扱うことができず、宗教シオニズムの形成史から民族宗教派の入植運動の歴史的展開を分析するということろまで踏み込むこともできなかった。これらは、本稿で明らかにした民族宗教派とその入植地の実態をシオニズム運動史およびパレスチナ地域史の中に位置づけていくうえで避けて通れない課題である。よって、これらの点は今後の課題としたい。

本稿はこれらの限界を抱えてはいるものの、宗教と政治と空間（ないしは環境）の相互作用に関する宗教地理学と政治地理学の議論に貴重な事例を提供するとともに、中東地域、パレスチナ／イスラエル地域、入植地問題、および民族宗教派に関する研究に対しても新しい視点と貴重な現地情報を提供できたと著者は考えている。